

巻頭言

伊藤 友子(教授/教育社会学)

現在も続く新型コロナウイルス感染症は、大学での日常も一変させました。「遠隔授業」に指定された授業では、教師である私は、レジュメや資料及び授業動画を作成し、大学のコンテンツに公開するという授業の準備に追われました。ただ、私が実施した「オンデマンド授業」は、一般的に「対面授業」と比較し、学生とのコミュニケーションを取りづらい欠点があると指摘されます。しかし一方、この形態の授業では、学

生が自分のペースで何度も「授業動画」を視聴し学べることから、より学生の内容理解が深まるという利点もあると、私は実感しています。

このことから、私は、今後訪れる「アフターコロナ社会」での大学の授業は、今回の経験をしっかりと検証し今後活かす努力を続けることで、確かな授業像の構築に繋がるのではないかと期待しています。

研究・教育紹介

外国語学部で学ぶ“日本古典文学”

村上 義明(准教授/日本近世文学)

外国語学部では、日本研究の分野として、日本語や日本文化、それから日本文学にかんする科目が開講されています。このうち、私が現在担当している講義の概要を紹介します。

まず、基礎科目の「日本文化概論」では、その成立以降、日本文化に多大な影響を与えてきた『伊勢物語』を通読しながら、各章段の内容をもとに文化にかんする様々なテーマについて考えています。

次に、発展科目の「日本文学講読」では、奈良時代から現代にいたる諸文献に記され、かつ九州にゆかりのある「松浦佐用姫伝説」を主たるテーマとして、各時代の文学作品の読解と比較をしています。同時に、それらの作品中に記される熊本や、ひろく九州にかんする内容も扱っています。

そして、応用科目の「日本古典文学」では、活字のテキストではなく、変体仮名(くずし字)で記された資料を読み、本文について各自が問題意識をもって積極的に調べ、発表する時間を設けています。これにより、一語・一字にいたるまで注意深く本文を読むことや、そのために必要となる様々な文献を調べる力が養われます。

外国語学部で学び、やがて地域や世界の課題を解決していくことになる学生であればこそ、海外はもちろん、日本のことにも目を向け続けることが大切だと考えます。日本研究についてのこうした講義を通して、学生は幅広い知識を身につけ、数多くの資料の読解と比較をし、疑問点や課題の解決のために確かな情報を収集することになりますが、これらはなにも日本古典文学を読むことにとどまらず、生涯にわたって考え、学び続けるために必要なことでしょう。

学生たちが講義を通して身につけたことを、どのように活用し、応用していくのか、その成長を楽しみにしています。

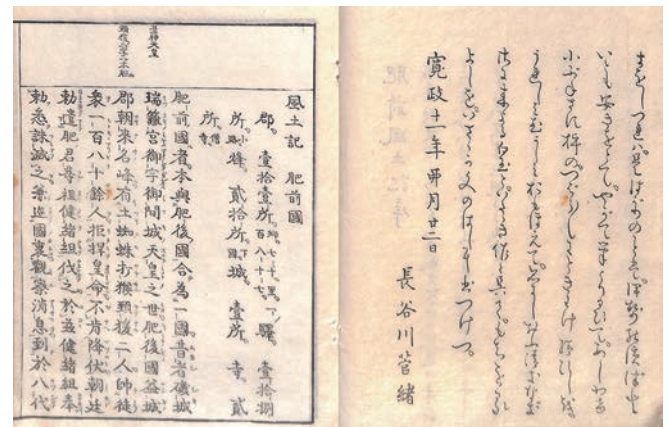


図 『肥前国風土記』
講義では、江戸時代に出版された資料も用いています。

書籍紹介

作者不詳、拙訳『ラサリーリョ・デ・トルメスの人生』(2018)水声社

岡村 一(教授/スペイン文学)

大学生のとき、よく上野動物園の猿山を見にいった。檻の前にたたずみ、個々の性格や互いの関係を観察するのがとても面白く、1時間ぐらいいはすぐに経った。人間観察のほうがその数倍面白いと気づいたのは、さて、いつごろだったろう。

若いときは感情の起伏が激しく、他者はおうおうにして感情をぶつける対象でしかない。他方、観察はそういうものからある程度超然としていなければならず、そのためにはいくらか歳を重ねている必要がある。だから人間観察をほんとうに面白く感じだしたのは、40の坂を越えたあたりはなかったか。「人間とはなにか」というテーマを、フィクションという形で展開するのが文学である。したがって文学の面白さを楽しみ

み感じだしたのも、そのころであったろう。

『ラサリーリョ』はピカレスクロマンの嚆矢で、16世紀はじめのスペインの下層社会を写實的に描いた名作である。50年前、学部の学生だったころから折に触れ読んできた。500年前の地球の反対側の人間の生態を見るのは面白かった。しかしほんとうの面白さがわかったのは、やはり40歳を過ぎてからであったろう。祈禱師、司祭、郷土、免罪符売り等々さまざまな人物が登場し、そのどれもが実に生き生きと、そして深く描かれている。そしてよく観察すると、彼らは現代日本のわれわれとかけ離れた、いわば珍しい生き物ではない。そこには時代や場所を超えた、人間の存在のありようが鮮やかに描きだされている。いよいよこの作品の翻訳にとりかかれることになったときは、それをどう工夫して日本語に移してやろうかと、武者震いした。

学科最新news

学科での英文法補習の取り組み

矢富 弘(講師/英語史)

英米学科での教育の目的の一つは、英語の運用能力を身につけることである。英語を「正しく」運用するためには、文法の理解は必須である。そのため、1年次の必修科目として「英文法」の授業を提供している。英文法の基礎を体系的に捉え、問題演習を通して文法をより体感的に理解することを目指している。2年次からのより発展的な学びのために、1年次に英文法の知識を確立することが重要である。知識の定着のために、毎回の授業の冒頭では小テストを実施しているが、それを補うために、英文法の補習を行なっている。小テストで十分な点数が取得できない場合、すぐに補習で復習を行うことができる。

私自身、授業でわかりやすく、血の通った説明で英文法を教えることに腐心している。それでも、私の説明が全ての学生にとって最善だとは思っていない。スポーツであれ、芸術であれ、学問であっても、人にはそれぞれの感覚があり、肌に合った説明のスタイルがある。補習は、学生の先輩にあたる大学院生と学部生に担当してもらっている。視点の近い先輩が指導して

くれることで、多角的な視点を養うことができる。

英文法補習の目的は1年生の知識の確立にあることは言うまでもないが、同時に、補習を担当する上級生の学びの場としても捉えている。教えるためには、しっかりと理解していなければならないし、責任感を持って教えるためには、知識と真摯に向き合う必要がある。このようなプロセスを循環させることで、学科の中で良い循環を作り出していきたい。大学で教育を始めてから、自分自身にできることには限りがあることに改めて気付かされた。大学という場は、一方的に教える場ではなく、相互に教え合う場である。私自身が直接指導するだけでなく、このような「場」を作ることが重要な仕事だと感じている。



編集人 坂田 直樹

〒862-8680 熊本市中央区大江2-5-1

TEL: 096-364-5161(代表) Mail: na-sakata@kumagaku.ac.jp